

令和元年度収集資料「深谷市航空写真」について

— 深谷市街地の移り変わり —

竹内 竜馬

はじめに

埼玉県立文書館地図センターでは、埼玉に関する歴史的・文化的に価値の高い地図や航空写真の収集・整理・保存を行い、県民の方々へ広く利用に供している。平成四年（一九九二）の開設以来収集を開始し、令和二年（二〇二〇）十二月現在、約八万点⁽¹⁾の地図・航空写真を収蔵している。また、令和元年度においても大変貴重な地図・航空写真を多く収集することができた。

令和元年度収集資料のうち、特に資料的価値の高いものが「深谷市航空写真」である。詳細は次章以降で言及するが、平成十九年（二〇〇七）から平成三十一年（二〇一九）までの各年の深谷市全域を収めている航空写真である。

本稿では、令和元年度地図センター収集資料である「深谷市航空写真」について、撮影年代や撮影範囲、写真点数などのデータ、文書館地図センターへの受入経緯と閲覧に向けての整理過程、そして「深谷市街地の移り変わり」を事例とした活用の一例を提示しながら本資料の紹介をしていく。御一読のうえ、「深谷市航空写真」を知っていただき、学問研究や不動産開発事業などで活用いただければ幸いである。

一 「深谷市航空写真」の概要 — 受入から公開まで —

本章では、「深谷市航空写真」について、資料概要や深谷市から文書館地図センターへと受入された経緯および公開に向けての整理過程について言及していく。

（一）「深谷市航空写真」の概要

最初に、「深谷市航空写真」の概要について、撮影年代や撮影範囲、写真点数などを述べていく。「深谷市航空写真」は、TIFFファイル形式の画像データがブルーレイディスクに記録されている状態で寄贈され、寄贈を受けたブルーレイディスクは十二枚であった。

撮影年代は、先ほども言及したように、平成十九年（二〇〇七）～平成二十七年（二〇一五）及び平成三十年（二〇一八）～平成三十一年（二〇一九）の十一年分にわたっており、一年分の写真のデータが一枚のブルーレイディスクに記録されている。なお、平成三十一年撮影の航空写真のみ二枚のブルーレイディスクに記録されている。具体的な撮影の月日は不明であるが、航空写真に写っている田畑の植え付け状況より、冬から春先頃に撮影されたものと推測される。

撮影範囲について、深谷市は平成十八年一月において近隣の岡部町・

川本町・花園町との市町合併を施行している。そのため平成十九年から撮影が始まっている「深谷市航空写真」の撮影範囲は合併後の市域であり、深谷市の面積である約百三十八平方キロメートルを収めている⁽²⁾。

撮影の目的は深谷市域における土地利用、税務などの調査や都市計画の基礎資料として撮影されたものと推測される。

次に、各々のブルーレイディスクに記録されている写真の点数や状態について言及する。

写真の点数は、一枚のブルーレイディスクに三百五十三点から三百五十四点が記録されており、資料群全体では三千八百九十一点となる。具体的には、平成十九年から平成二十一年までは各三百五十三点が記録され、それ以降の年は各三百五十四点が記録されており、平成二十一年と平成二十二年を境に写真の点数が異なる。

点数が異なる理由を述べていくと、まず問題となる写真が深谷市と群馬県太田市との境を流れる利根川の中洲部分である。平成二十一年までの写真にはその地点の写真は記録されていないが、平成二十二年以降の写真には記録されている。このような状況となった理由がうかがえるのが、平成二十二年一月七日付の総務省告示第一号「県の境界にわたる市の境界変更の件」⁽³⁾である。この告示は深谷市と群馬県太田市との境界を変更したという旨であり、具体的には深谷市高島の一部を太田市へ、太田市前小屋町の一部を深谷市へと編入し、市の境界が利根川の中洲部分へと変更されている。編入された理由はこの告示だけでは不明であるが、この変更によって改めて市域全体を網羅するために、この年から撮影され始めたものと考えられる。

また写真の状態については、ブルーレイディスクの劣化かどうかは不明であるが、いくつかの写真に黒線が入って見ることができない部分があるもの、データが破損し写真自体が閲覧できないものも見受けられる。しかしながら、大部分の写真は支障なく閲覧できる状態であるため、状態は良好であるといえる。今後永く資料を保存するために複製の製作を行っていく予定である。

(二) 受入経緯と閲覧への整理過程

次に、「深谷市航空写真」の受入の経緯として、文書館地図センターでは毎年五月～六月頃に埼玉県各部局の課所館、県内市町村などへ地図の寄贈依頼を行い、多くの地図を御寄贈いただいている。また、令和元年度からは地図の収集対象を地図のみから航空写真・空中写真まで拡大した。その結果として、年度末において深谷市秘書課より深谷市で撮影した航空写真を寄贈したい旨の連絡をいただいた。その後、深谷市秘書課から文書館地図センターへ御寄贈いただき、令和元年度の収集資料として、「深谷市航空写真」が収集資料に加わった。そして、この資料の閲覧公開に向けた作業が始まった。

令和元年度中の整理では航空写真の確認、写真番号の表作成までを行うことができたが、その後の整理作業は翌年度に持ち越しとなった。令和元年度に収集した資料が翌年の令和二年度末の公開・閲覧となった背景としては次の四点が挙げられる。一点目に寄贈を受けたのが年度末に近かったこと、二点目に文書館にブルーレイレコーダーがなかったこと、三点目に後述するが航空写真のデータ量が膨大な量であったこと、最後の四点目に航空写真の撮影位置を特定するための標定図が

なく、新たに作成する必要があったことが背景として挙げられる。

令和二年度となり、「深谷市航空写真」の公開に向けて、本格的な整理作業を行った⁽⁴⁾。最初に行った整理作業としては、航空写真の撮影地点を特定するために必要不可欠となる標定図の作成である。標定図とは、航空写真の撮影地点や飛行機が撮影の際に飛行した撮影コースとコース番号、写真番号などを地図上に表示した図である⁽⁵⁾。

標定図の作成方法としては、写真をパソコンのディスプレイに表示させるとともに、最も写真を拡大させた状態で写真の中心を特定し、地図に落とししていく方法を採用した。

まず、国土地理院が発行している「二万五千分の一地形図」のうち、深谷市域を網羅する「本庄」・「深谷」・「寄居」・「三ヶ尻」の四点の地形図を二部ずつ用意した。二部用意した理由は文書館の二階文書閲覧室と四階地図閲覧室の双方に配置し、閲覧時の利便性を図るためである。

その次に、写真を見ながら、その中心を割り出した。その割り出した地点を地形図上に鉛筆で印を付けていくという作業を繰り返し行っていく。なお、この作業は写真に写っている道路や河川、住宅の位置などを地形図と比較しながら、印を落とすといくといくやすくなる。繰り返し写真の中心点の印を付けていくと、撮影された点は同一直線上に並んでいる。この撮影地点を結んだ線が写真の撮影時に飛行した航空機の撮影コースである。

そして、鉛筆で印をつけた撮影地点に丸形のカラーシールと撮影地点の番号（一〜三五四）を付して、地形図上での撮影地点を明確にわかるようにした⁽⁶⁾。これによって評定図が完成し、評定図と撮影地点と資料番号との対応表をA2判サイズのクリアファイルに添付した。

以上の公開にむけた整理過程の作業によって、利用者の求めに応じた写真を提供できるようになり、閲覧の体制が整った。今後、令和三年（二〇二一）四月に閲覧開始予定である。

標定図の作成を通じて「深谷市航空写真」の撮影地点などについてわかったのは次の二点である。

一点目に写真の撮影地点間の距離は一定であることがわかる。具体的には、地形図上で約三センチメートル、実際の距離に換算すると、約七百五十メートルの間隔であることがわかる。

二点目に深谷市の全域を撮影するために、全部で二十八本のコースを飛行している。各撮影コースの間隔も一定の距離が取られていることがわかる。さらにコース毎の間隔は地形図上で約二・五センチメートル、実際の距離で約五百メートルの間隔である。

以上より、「深谷市航空写真」における一点の写真は南北方向に約二百五十メートル、東西方向に約三百七十五メートルという範囲を収めている。この範囲で収めることで、土地の状況を分かりやすく把握するために、数百メートル単位の範囲で撮影したものと推察できる。

二 深谷市街地の移り変わり ― 明治期から現代までの様相 ―

本章では、深谷市街地の変遷を考察していくが、まず考察の前に近世（江戸時代）から現代にかけての深谷の人口や軒数などをまとめる。

次に本題として、明治期から現代までの深谷市街地の移り変わりについて、「深谷市航空写真」や埼玉県撮影の「埼玉全県航空写真」⁽⁷⁾、

国土地理院発行の「二万五千分の一地形図」及び「五万分の一地形図」⁽⁸⁾、旧陸軍参謀本部陸地測量部作成の「第一軍管地方二万分の一迅速

測図原図」⁽⁹⁾の各資料を用いて、深谷市街地の移り変わりを「深谷市航空写真」の活用事例の一つとして提示していく。

(一) 近世の中山道深谷宿

近世の深谷宿から現代までの概要を押さえていく。深谷宿は五街道の一つである中山道の宿場で、江戸日本橋から九番目の宿場である。

文献から見ていくと、「新編武蔵風土記稿」⁽¹⁰⁾によれば、「深谷宿は中山道の駅亭にして、江戸より十九里を隔つ、東の方熊谷宿へ二里二十七町、西の方児玉郡本庄宿へ、二里二十丁の人馬継立をなせり、又毎月五十の日に市を立て、諸品の交易をなす、(中略)家数四百七十余、多くは中山道往来の左右に軒を連て住す、(後略)」とある。要約すると、深谷宿は中山道の宿場町であり、熊谷宿との距離は二里二十七町(約十一キロメートル)、本庄宿との距離は二里二十町(約二十キロメートル)、熊谷―深谷間および深谷―本庄間の人馬継立(伝馬役による人や荷物の輸送)を行っている」とある。伝馬役とは宿場の重要業務である貨客輸送を行うために必要な人員と馬の負担であり、江戸幕府から各宿場に課された負担である。本稿では宿間の人馬継立の方法や伝馬役負担に関する詳細な説明は省略するが、寛文五年(一六六五)、中山道の各宿場には原則として五十人五十疋の人員と馬を宿場に常備することが定められている⁽¹¹⁾。また五十の付く日に市を行い様々な品物が売買されていることも確認できる。深谷宿の軒数は、「新編武蔵風土記稿」が成立した文化・文政期(一八〇四―一八三〇)時点で約四百七十軒があり、多くは中山道沿いに建っていると記されているが、人口についての記載は見当たらない。

次に、「中山道宿村大概帳」⁽¹²⁾においては、天保十四年(一八四三)時点の深谷宿に関する記載がある【史料一】。

【史料一】

大熊善太郎御代官所武蔵国榛沢郡但、深谷領

一、合高式百式拾四石六斗五升九合八夕^⑤ 深谷宿

江戸江拾九里五町四拾間・熊谷宿江式里半九町・本庄宿江式里半七町

(中略)

原之郷村境ち東大沼村境迄宿往還拾六町五間三尺之内

一、宿内町並東西江拾五町程

天保十四卯年改

一、宿内人別千九百式拾八人 内男八百九拾五人・女千三拾三人

同

一、宿内惣家数五百式拾四軒

内

本陣

凡建坪百六拾坪
門構・玄関附

字横町

壺軒

脇本陣

凡建坪七拾五坪
門構・玄関附

字下町

壺軒

脇本陣

凡建坪三拾九坪
門構無之、玄関附

同

壺軒

同

凡建坪三拾七坪

字中町

壺軒

門構・玄関共無之

字横町

同

凡建坪四拾坪

壹軒

門構・玄関共無之

旅籠屋八拾軒

大 七 軒

内 中 貳拾軒

小 五拾三軒

(後略)

【史料一】は「中山道宿村大概帳」のうち、深谷宿についての記載項目であり、宿場の距離や軒数と人口、本陣や旅籠屋などの施設の項目に限定した。その記載をまとめていくと、人口と軒数は天保十四年時点において宿高約二百二十四石に対して五百二十四軒・千九百二十八人が居住していることがわかる。

ここで中山道の宿場町と比較していく。比較の根拠として、『新編埼玉県史』に掲載の表⁽¹³⁾を参考にしていくが、表の掲載は紙面の都合によって割愛させていただく。深谷宿の宿高は県内の中山道宿場町(蔵宿・本庄宿)で最も少ない石高である。その規模は県内最大の宿高である熊谷宿約二千二百四石の十分の一である。それに対する人口は九宿中五番目の多きである。九宿中の比較で深谷宿の特徴としては、旅籠屋の数が最も多いことである。深谷宿は大中小八十軒の旅籠屋があるが、この数は隣の熊谷宿十九軒の約四倍の数である。天保十四年時点の旅籠屋軒数の多さだけで宿場の賑わいを検討するのは材料不足ではあるが、県内の宿場町の中でも大きな賑わいがあったことがうかがえる。

その次に、「武蔵国郡村誌」⁽¹⁴⁾は昭和二十八年(一九五三)時点の深谷駅・深谷町(深谷宿)の概要をまとめている。明治時代以降の管轄沿革として、明治元年(一八六八)に武蔵知県事の管轄となり、翌年の正月には大宮県、二月に岩鼻県に属している。また明治四年十一月には入間県となり、明治六年六月に熊谷県の管轄となっている。幅員は「東西式町三拾壹間三尺南北七町貳拾八間」とあり、軒数(戸数)・人口は戸数総計六百五十戸・人口総計三千二百四十六人である。

最後に現在の深谷市は、明治二十二年の町村制施行・町村合併によつて深谷町となり、昭和三十年にも町村合併を行い、深谷市となった。そして、平成十八年(二〇〇六)の市町合併によつて現在の深谷市が誕生した。面積は約百三十八平方キロメートル、人口は令和二年十二月現在で約十四万二千人である。また深谷市は第一国立銀行の創立などに係わり、近代日本経済の基礎を築いた渋沢栄一⁽¹⁵⁾の出身地である。産業は農業や工業が盛んであり、ネギやチューリップなどが栽培されている。一方で工業では明治二十年から平成十八年まで日本煉瓦製造による煉瓦生産が盛んであった。また現在では工業団地が多く所在しており、東芝など大企業の工場が稼働している。

(二) 明治期から現代までの市街地の様相と変遷

次に、深谷市街地の様相とその移り変わりを述べていく。今回は、明治期と大正期については、航空写真資料がないとともに地形図も限られているため、明治十八年(一八八五)と大正六年(一九一七)との約三十年間で考察をする。また昭和期から平成期までに関しては、昭和二十二年(一九四七)から平成三十年(二〇一八)までを約二十



〈図一〉迅速測図原図「埼玉県武蔵国榛沢郡深谷駅」(明治十八年〈一八八五〉)

年毎に考察していく。

まず、明治十八年に作成された迅速測図には旧中山道沿いに建物が密集している様子が描写されている(図一)⁽¹⁶⁾。通りの左右に建物が密接していることがわかる。この通りは寺院などの所在位置から検証すると、現在の国道十七号線ではなく、旧中山道である。迅速測図には国道十七号線は表れておらず、旧中山道がこの時期でも主要道路であることがうかがえる。

さらに、集落の周辺や日本鉄道深谷駅停車場(現JR高崎線深谷駅)周辺には田や畑が広がっていたことも(図一)から読み取れる。

約三十年後の大正六年の様相(図二)⁽¹⁷⁾を見ていくと、明治十八年時点と比較して旧中山道から深谷駅の方向へと建物が広がっているものの駅周辺では建物が密集しておらず、駅の半径五百メートル⁽¹⁸⁾の範囲には田畑が残っている。



〈図二〉五万分の一地形図「深谷」(大正六年〈一九一七〉)



〈写真一〉米軍撮影空中写真(昭和二十二年〈一九四七〉)

る。畑地の種類は迅速測図では不明であったが、(図二)から深谷駅の周辺地域には桑畑や針葉樹などがあったことが確認できる。

次に、三十年後の昭和二十二年時点を確認していく(写真一)⁽¹⁹⁾・(図三)⁽²⁰⁾。戦後初期の深谷市街地では、明治期・大正期と比較して市街地の拡大が顕著にみられる。かつて田畑が広がっていた深谷駅の周辺地域には、建物が密集して建ち始めているが、その外側には、面積は減少傾向にありながらも田畑が広がっていることが確認できる。

さらに、鉄道と公共施設に着目すると、大正六年の地形図(図二)と昭和二十二年の地形図(図三)に共通して、深谷駅から北東方向へ、高崎線とは別の線路が延びていることが確認できる。この路線



〈図三〉五万分の一地形図「深谷」(昭和二十二年〈一九四七〉)



〈図四〉二万五千分の一地形図「深谷」
（昭和三十九年〈一九六四〉）

桑畑の広がり方から、明治期より昭和三十年代にかけての深谷では、養蚕が産業として盛んに行われていたことがうかがえる。

次に、昭和四十一年の様相をみていくと、〈写真二〉⁽²²⁾及び〈図四〉⁽²³⁾の通りである⁽²⁴⁾。この年で特筆すべきことは国道十七号線が新たに表れていること



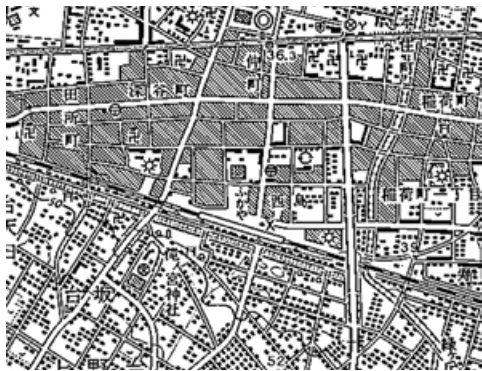
〈写真二〉埼玉全県航空写真
（昭和四十一年〈一九六六〉）

また深谷駅南側地域には、明治期・大正期と同様に桑畑が広がっており、住宅などは確認できない。この地域は〈図三〉には地名の記載がないが、現在の深谷市西島町五丁目・上野台・台坂東の辺りである。

三〇では郵便局や銀行などが新設され、公共施設の面でも街の発展がうかがえる。

は日本煉瓦製造株式会社専用線で明治二十八年に開通し、日本鉄道深谷停車場から大里郡大寄村上敷免（現深谷市上敷免）に所在する工場までの約四キロメートルを結んでいたが⁽²¹⁾、現在は廃線である。

公共施設としては、〈図二〉に役場や警察署が記載されているが、〈図



〈図五〉二万五千分の一地形図「深谷」
（昭和五十九年〈一九八四〉）

利用状況が変化した要因の一つには、昭和二十年代に誕生の団塊世代が三十歳代後半から四十歳代前半となり、親と同居しない核家族化が進行し、住宅の建築ラッシュに因る結果として住宅地が不足したことが挙げられる⁽²⁷⁾。

さらに、公共施設に着目すると、住宅及び人口の増加に



〈写真三〉埼玉全県航空写真
（昭和六十年〈一九八五〉）

その次に、昭和六十年頃の県航空写真〈写真三〉⁽²⁵⁾と地形図〈図五〉⁽²⁶⁾を確認すると、これまで確認できた田畑や駅南側の桑畑が姿を消し、住宅地が形成されている。このように畑地から住宅地へと土地利用状況が変化した要因の

である。国道十七号線沿いでも旧中山道と同様に建物ができ始めており、国道十七号線が主要道路となっていく動向がみえる。

また深谷駅南側の地域では、これまでの動向に変化が見え始める。具体的には、田畑の中に家々が並び始めている。

の工業団地造成以降の急激な人口増加に伴う住宅地不足に因るものであると推測される。

よって、小中学校や高等学校が新設されている。また警察署の移転や新たな郵便局の開局、工場の新設なども読み取れる。

平成期に入ると、深谷市における市街地化の進行は、昭和期と比較して落ち着きがみられる〈写真四〉⁽²⁸⁾。

〈写真四〉は「深谷市航空写真」のうち、平成十九年に撮影された写真であり、深谷駅とその周辺地域である。写真をみていくと、住宅地内に畑地は見られるものの、昭和六十年と比較して、畑地の面積

は大きく減少している。



〈写真四〉深谷市航空写真（平成十九年〈二〇〇七〉）

深谷駅南側の地域である深谷市上野台は、先述のように住宅地が拡大している。これに加えて、国道十七号線を挟んだ北側の地域である深谷市本町・仲町・栄町・東大沼・西大沼などの地域においても駅南側と同様、住宅地化が進行している。〈図二〉〜〈図四〉から、大正六年から昭和四十年頃までは水田や桑畑が広がっていた地域であることが確認できる。この地域も深谷駅に近いこと、

国道十七号線の開通と沿線開発、工業団地内の工場従業員やベビーブームによる人口増加及び核家族化の進行によって、農作地から住宅地へと移り変わったものと考えられる。

最後に、本節の結びとして、平成三十年の深谷市街地と現在の深谷駅や国道十七号線沿い、旧中山道沿いの様相を紹介していく。

〈写真五〉⁽²⁹⁾は、平成三十年撮影の「深谷市航空写真」であり、写真の範囲は〈写真四〉と同一である。また参考として地形図〈図六〉⁽³⁰⁾も掲載する。〈写真四〉とは十年程しか経過していないが、わずかな



〈写真五〉「深谷市航空写真」（平成三十年〈二〇一八〉）

がらの農作地が住宅地へと転換した土地利用状況が確認でき、写真全体に住宅地が広がっていることがわかる。

ここで現在の深谷市街地と旧中山道の町並みの現地調査を行った⁽³¹⁾。その写真が〈写真六〉〜〈写真八〉⁽³²⁾である。東京と新潟を結ぶ国道十七号線は深谷市の主要幹線として機能しており、多くの自動車が行き来している。時折、交通渋滞も発生していた。通り沿いには飲



〈写真七〉国道十七号線と深谷市役所



〈写真六〉旧深谷宿西側
入口の常夜燈



〈図六〉二万五千分の一地形図
「深谷」(平成二十九(二〇一七))



〈写真八〉旧中山道の様相

食店などが建ち並び、賑やかな雰囲気である。一方、旧中山道へ向かうと、こちらも交通量はありながらも静かな雰囲気であった。昔ながらの商店も残っていたが、シャッターが閉まる商店や建物を取り壊した後の空き地もあり、淋しさが漂う雰囲気も垣間見られた。

しかし、そのような雰囲気のなかにも、かつての宿場町の名残を見ることができた。深谷宿の東西入口には常夜燈⁽³³⁾があるが、現在も両方の常夜燈が旧街道沿いに建っており、

深谷市指定文化財であることを示す看板もある。この他にも旧本陣跡や問屋場跡を示す碑や看板なども建っている。街全体の雰囲気としては、深谷出身の近代史上の偉人である渋沢栄一が大河ドラマに取り上げられ、新紙幣の肖像となることから、のぼりやポスターが多く見られる。渋沢栄一を通じて深谷市の観光と知名度アップに力を入れている様子が伝わって来た。

おわりに

本稿においては、文書館地図センターにおける令和元年度収集資料「深谷市航空写真」の概要と閲覧に向けた整理過程を報告し、活用の一事例として明治期から現在までの深谷市街地の変遷を考察した。

「深谷市航空写真」は十三年前から現在までの深谷市全域を写した大変貴重な資料である。深谷市街地の移り変わりを資料の活用事例として提示したが、その他の活用事例として小学校での社会科学授業の教材や夏休みの自由研究、歴史地理学の研究、不動産業での土地利用調査など様々な分野において活用できる重要な資料である。

最後に、本稿の執筆にあたって御指導を賜った地図センター担当の若松良一主任専門員兼学芸員、昨年度の整理に御尽力いただいた前地図センター担当の木暮咲樹学芸員をはじめとする歴代の担当の皆様、そして、本資料を御寄贈していただいた深谷市長に対し、心より厚く御礼を申し上げる。

註

- (1) 埼玉県立文書館要覧第三八号（令和二年度）、一八頁（埼玉県立文書館ホームページ）（<https://monjo.spec.ed.jp/>）より引用（閲覧日：令和二年十二月十四日）
- (2) 深谷市公式ホームページ（<http://www.city.fukaya.saitama.jp/>）より引用（閲覧日：令和二年十二月十四日）
- (3) 『官報』第五二二七号、平成二十二年一月七日
- (4) 筆者が令和二年度の地図センター担当となり、前任者より作業を引き継いだため、前年度の整理については前任者などから聴いたものである。
- (5) 一般財団法人日本地図センター『地図と測量のQ&A』（一般財団法人日本地図センター、二〇一三年）
- (6) 平成十九年～平成二十一年は全三百五十三点であるが、後年の全三百五十四点の方に合わせて作成をした。平成十九年～平成二十一年の場合、標定図の〇三一（二六）は欠番の扱いとなる。
- (7) 埼玉県が昭和四十一年（一九六六）から平成七年（一九九五）まで五年ごとに独自で撮影した航空写真で、市街地・農地の土地利用や植生分布の状況、道路・建物の状況を読むことができる。以下、「県航空写真」とする。
- (8) 以下、「地形図」とする。
- (9) 陸軍省が明治十三年（一八八〇）～明治十九年（一八八六）に作成の地図である。以下、「迅速測図」とする。
- (10) 蘆田伊人編『大日本地誌大系（十一）新編武蔵風土記稿 第十一巻』（雄山閣、一九六三年）、二二三頁～二三五頁
- (11) 児玉幸多『近世宿駅制度の研究 増訂版』（吉川弘文館、一九六〇年）、二〇九頁・児玉幸多『近世交通史の研究』（筑摩書房、一九八六年）、二二頁
- (12) 児玉幸多編『近世交通史料集五 中山道宿村大概帳』（吉川弘文館、一九七一年）、一〇一頁～一〇五頁
- (13) 『新編埼玉県史 資料編十五 近世六・交通』（埼玉県、一九八四年）、一二頁「表三 県内宿駅概要 中山道」
- (14) 埼玉県編『武蔵国郡村誌 第九卷』（雄文閣、一九五四年）、二〇九頁～

二一三頁

- (15) 渋沢栄一（天保十一年（一八四〇）～昭和六年（一九三二））は榛沢郡血洗島村（現深谷市血洗島）生まれ、幕末期に江戸幕府の家臣となり、明治維新後は大蔵省に出仕した。退官後、実業家として第一国立銀行（現在のみずほ銀行）など多種多様な企業の創立に係わった。享年九十一歳。また現在の動向として、二〇二一年NHK大河ドラマで採り上げられるとともに、二〇二四年度から発行の新一万円札の肖像となる予定である。
- (16) 迅原八七一「埼玉県武蔵国榛沢郡深谷駅」（陸軍省、一八八五年）
- (17) 「五万分之一地形図」深谷二（陸地測量部、一九一七年）
- (18) 五万分之一地形図上の一センチメートルは実距離で五百メートルとなる
- (19) 空中五一二「米軍撮影空中写真」（国土地理院、一九四七年）
- (20) 「五万分之一地形図」深谷五（地理調査所、一九四七年）
- (21) 鉄道省監督局編『地方鉄道及軌道一覽』（鉄道同志会、一九四四年）
- (22) 航S四一「埼玉県全県航空写真」A四一―一四
- (23) 「二万五千分之一地形図」深谷一（地理調査所、一九六四年）
- (24) 以後、写真と地形図で作成年が異なることがあるが同一時期として扱う
- (25) 航S六〇「埼玉県全県航空写真」A一〇―三七（埼玉県、一九八五年）
- (26) 「二万五千分之一地形図」深谷五（国土地理院、一九八四年）
- (27) 縄田康光「歴史的に見た日本の人口と家族」（参議院事務局『立法と調査』、二〇〇六年）、九六頁～一〇〇頁
- (28) 「深谷市航空写真」一〇〇六～一〇〇八・一一〇六～一一〇八・一二〇六～一二〇八（深谷市、二〇〇七年）、なお〈写真四〉及び〈写真五〉は九点の航空写真を繋げて並べたものである。
- (29) 「深谷市航空写真」一〇〇六～一〇〇八・一一〇六～一一〇八・一二〇六～一二〇八（深谷市、二〇一八年）
- (30) 「二万五千分之一地形図」深谷十（国土地理院、二〇一七年）
- (31) 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、手指の消毒やマスク着用を徹底した。
- (32) いずれの写真も筆者撮影である。（撮影日：令和二年十二月六日）
- (33) 常夜燈は夜道の安全を守るために街道沿いに設置された街灯であり、宿場の出入口の目印としての役割も果たした。